

2024年度

国語

(問題)

< R 06182081 >

注意事項

- 一 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 二 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 四 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- 五 受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

57001番



万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 六 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 七 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
- 八 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
- 九 いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
- 十 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

文学、とりわけ小説と、歴史学との関係をどう捉えるかという問いかけは、旧くて新しい。両者がどちらも語りの構造に依拠するとして言説上の類似性を指摘する立場であれ、逆に両者の認識論的な差異を強調して、明確な境界線をもうける立場であれ、あるいはまた一定のテーマを論じる歴史学が文学作品を重要な史料として活用する場合であれ、文学と歴史学、作家と歴史家は緊張をはらんだ交流と論争を繰り返してきたと言えるだろう。文学と歴史学を対比させる思考は、西洋ではアリストテレスにまで遡る。彼が『詩学』のなかで指摘した両者の位相の違いは、つとに名高い。

詩人（作者）の仕事は、すでに起こったことを語るのではなく、起こりうることを、すなわち、ありそうな仕方、あるいは必然的な仕方、起こる可能性のあることを、語ることである。なぜなら、歴史家と詩人は、韻文で語るか否かという点に差異があるのではなくて〔中略〕、歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語るといふ点に差異があるからである。したがって、詩作は歴史にくらべてより哲学的であり、より深い意義をもつものである。というのは、詩作はむしろ普遍的なことを語り、歴史は個別的事象を語るからである。

歴史学は過去に生じた個別的事象で、一回かぎりのこと、そしてしばしば偶発的で、人間の意志や企図とは関係のない出来事を叙述する。それはときに、さまざまな出来事を時間の流れにそって、しかし論理的な脈絡を見いだすことなく記述するだけの年代記になってしまう。他方、詩（文学）は、個人の行動と人生を語る場合であれ、あるいは集団の運命を描く場合であれ、そこに **A** なつながりを構築することで、普遍的な次元を有するドラマをめざす。アリストテレスがここで念頭に置いているのは、悲劇や喜劇のような劇形式と、ホメロスの叙事詩にはかならない。歴史学は過去を記述し、文学は未来を展望する。文学は個人の生を、起承転結をそなえた物語として、ひとつの目的を志向する行為の連続体として語ることができるが、歴史の出来事はその偶発性を含めて、そのような完結した全体として構成することがむずかしい。アリストテレスはそれゆえ、文学が歴史学よりも哲学的で、普遍的だとしたのだった。

もちろん、ことはそれほど単純ではないのだが、これ以降、文学Ⅱ普遍性、歴史学Ⅱ個性性という二項対立の図式が長い間にわたって流布することになった。

いま「歴史学」という言葉を用いたが、じつは西洋で過去の出来事を記述し、その因果関係を探る営みが歴史学というひとつの学問、あるいは科学として成立するのは十九世紀に入ってからのことにはすぎない。それまでは歴史を語ることは「文芸」や倫理学の一部と見なされていた。歴史叙述はしばしば国王や権力者たちの事績を語り、王朝の交替劇を描きだすことに尽きていた。そうした傾向に異議を申し立てた十九世紀前半のロマン主義歴史学が、文明の歴史、国民の歴史、民衆の生活と心性を記述する新たな方法を提唱したのだった。この時代、歴史学と文学は事実と虚構、学問と物語として対立したわけではなく、どちらも歴史を解釈し、国民の習俗を叙述する言説として相互補完的だった。

そのような時代に誕生したのが、リアリズム文学である。リアリズム文学（とりわけ小説）²は、歴史の現実が人々に突きつけた諸問題を理解し、表象しようとする意志と切り離せない。そしてそれがフランス革命後に生まれたのも、驚くにはあたらない。数世紀のあいだ続いた王政を崩壊させ、国家の父としての国王を処刑までした革命は、統治原理を根本から変え、その後の社会はまさに未曾有の時代に突入していった。新しい世界の誕生は、新たなものの見方を要請し、現実を認識し、表現する新たな方法を求めるだろう。

文学の領域も例外ではなかった。こうして作家たちはまず、「いま」を描き、自分たちが生きている時代のメカニズムを抉りだそうとしたのである。バルザック、スタンダールからフロベール、ゾラにいたる系譜が、このリアリズム文学のくつきりした稜線を構成する。哲学者ランシエールが、近代リアリズムと歴史学、さらには社会科学がほぼ同時期に創出されたことを想起しながら、文学には現実を認識する能力があり、「フイクションとしての合理性」が具わっていると強調したのは同じ趣旨に沿う。

他方で、現在を理解するためには過去を知らなければならぬ。作家たちが同時代の歴史家たちと競合するかのようには、歴史の解釈を提示する「歴史小説」を発表したのはそのためである。バルザック、デュマ、フロベール、ゾラから二十世紀のユルスナールに至るまで、フランスはこのジャンルで傑作を生みだし続けてきた。革命後の近代小説の歴史において、最初に形成されたジャンルのひとつが歴史小説だというのは、文学と歴史学の浅からぬつながりをよく証言している。

そして現代フランスでは、歴史に素材を汲む新たなかたちの文学が重要な潮流を形成し、読者の支持を得ている。現代の歴史学や社会科学でしばしば話題になる「記憶」や「忘却」がテーマになっている文学作品が、二十世紀に入ってから数多く刊行され、名誉ある文学賞を授与されるなど高い評価を受けていることは、注目に値するだろう。実際、ナチスや、ユダヤ人迫害や、第二次世界大戦を主題にした文学の隆盛は、近年のフランスで顕著な傾向である。作者は狭義の小説家にかぎらず、ジャーナリストや歴史家にも及ぶ。歴史の現実が提供する要素にもとづいて組み立てられた物語は、しばしば「エグゾフィクション」と呼ばれる。実在した人物を登場させるが、歴史の空白や沈黙を物語によって充填し、資料調査する作者みずからの営みも物語の一部として組みこむという点で、歴史書やルポルタージュと異なる。そこには、文学が独自の技法によって、歴史的な知と解釈を創出できるはずだ、という認識が存在する。

他方、歴史学は文学とどのように関わってきたのだろうか。

ロマン主義時代に文学との蜜月状態のなかで誕生した近代歴史学は、フランスでは、その後の世紀後半にいたって、科学的な学問分野として実証主義歴史学がソルボンヌ大学を中心にして確立する。それにともなって、制度的な歴史研究は、真実と事実の名において、そしてそれを因果論的に記述する学問として、みずからを文学と差異化していった。文学はあくまでフイクションであり、歴史学はフイクションの誘惑から解放されて、歴史的現実を再構成するのを目的としたのである。

しかし一九七〇年代の言語論的転回や社会構築主義を経て、ポール・ヴェーヌやヘイドン・ホワイトやポール・リクールなどが、歴史叙述のうちに物語との構造的な相同性を指摘したことにより、歴史学と文学創造の関係性に新たな光があてられるようになった。二十世紀初頭の実証主義が主張したのとは異なり、歴史学は純粹に客観的、中立的な科学ではなく、それを生産する歴史家自身の主観やイデオロギーと切り離せない知的な営みである。それは歴史学だけの問題ではなく、社会学や人類学などの社会科学全般について言えることだ。

歴史学と文学の関わりを証言するもうひとつの例は、歴史家が史料として文学作品や、作家の書き残した日記や書簡を使用する傾向が、近年顕著になってきていることである。その現象がとりわけ明瞭なのは、文化史や感性の歴史の領域であろう。事件や出来事ではなく、人々の私生活や内面性を分析する歴史学にとって、文学作品や日記や書簡はきわめて示唆的なコーパスである。私生活や内面性の痕跡は、行政・警察文書や、裁判記録や、教会の古文書など従来の歴史学が特権化してきた史料にはほとんど残らないからだ。最近注目度が高まっている「感情の歴史」についても、同じようなことが言える。そしてこの歴史学の潮流を代表するのが、フランスではアラン・コルバンであることに異論の余地はないだろう。

現代フランスの歴史家たちのあいだには、さらに新たな流れも生まれつつある。叙述スタイルそのものに、歴史小説、自伝、オートフィクション、ドキュメンタリーなど現代文学の形式や手法を積極的に取りこんでいるこ

とだ。叙述の方法として意図的に物語を選択することで、ときには歴史家自身が一人称の「私」として登場する。調査の過程、それに伴う驚き、逡巡などが歴史的な分析のなかに組みこまれるということである。この新潮流を代表する一人イヴァン・ジャブロンカが『歴史は現代文学である』（二〇一四）において、「方法としての私」、「方法としてのフィクション」という名称で定式化した概念である。彼はフィクションが有する発見的な次元を次のように述べている。

フィクションはそれ自体では虚偽でも真実でもない。フィクションは、自分が自足していると考えるかぎり、真実と関係を持たない。フィクションは、現実を再現することで満足するかぎり、真実と不完全な関係しか結ぶことはできない（……）。反対に、フィクションは、知識の操作者として知の生産のプロセスに加われば、真実と関係を結ぶことができる——たとえば、問題（スコット、バルザック）、異化（スターン、ボルヘス）、仮説（ドストエフスキー、ウエルズ）、理念型（ボヴァリー夫人のような女性、カフカの世界）、叙述の構成（ウルフ、ドス・パソス、フォークナー）といったかたちにおいて。

実際、多くのすぐれた小説が歴史の問題化に寄与し、社会的な問いかけを誘発するという点で「方法としてのフィクション」になっていることを、ジャブロンカは高く評価する。文学創造は、研究、発見、認識という側面を排除しない。彼がめざすのは、詩学と美学と物語性を兼備した文学的な歴史叙述である。

（小倉孝誠『歴史をどう語るか』による）

問一 傍線部1「論理的な脈絡」とあるが、歴史における「論理的な脈絡」はということか。それを言い換えた語句を本文中から漢字四文字で抜き出し、解答欄に記しなさい。

問二 空欄 A に当てはまる言葉（漢字三文字）を考えて、解答欄に記しなさい。

問三 傍線部2「そしてそれがフランス革命後に生まれたのも、驚くにはあたらない」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- イ フランス革命後には、歴史学が科学と接近したように、文学もリアルな科学的叙述が必要とされたから。
- ロ フランス革命後には、王政を倒して処刑までしたことの原因と結果の関係を明らかにする歴史学が求められたから。
- ハ フランス革命後には、唯一の権力者だった王朝の交替劇はもう必要なくなり、新たに権力を得た民衆の歴史的な記述が求められたから。
- ニ フランス革命後には、歴史学と文学との対立が解消されて、ただ歴史を記述するだけでなく、歴史の未来を展望する文学が求められたから。
- ホ フランス革命後には、それまでにはなかった国王に支配されない社会のあり方をそのまま書くことができなくなるアリズム文学が求められたから。

問四 傍線部3 「フィクションとしての合理性」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- イ 文学ではあるが、社会の法則を見ぬき、それを整合性をもって書くこと。
- ロ 文学と歴史学とがわかちがたく結びつき、歴史の統合原理を基礎にしたこと。
- ハ 文学が同時代のメカニズムを理解することで、歴史小説の基礎となったこと。
- ニ 文学が現実を正確に認識することで、現実をリアルに書けるようになること。
- ホ 文学が独自の技法によって、理にかなった形で歴史を作り出せるようになること。

問五 傍線部4 「記憶」や「忘却」がテーマになっている文学作品は、なぜいま支持を得ているのか。その

理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- イ 事実の中で何が記憶され何が忘却されるのか、その理由にこそ歴史の真実があると考えられ始めたから。
- ロ 実証主義的な歴史学が記述する歴史に対して、記憶や忘却を組み込んだフィクションが小説の本分だから。
- ハ フランス革命後の歴史小説が書いたのは国家の権力闘争の歴史でしかないのに対して、大衆を書いた歴史小説が求められたから。

ニ 事実と認定されたことだけを記述した歴史よりも、人々の声を拾い上げた文学こそが歴史の真実を書いていると考えられ始めたから。

ホ 戦争や迫害の歴史では多くの事実が秘密にされたまま眠っているので、そうした秘密にされた事実を記憶に頼りながら探し当てることは文学にしかできないから。

問六 傍線部5 「叙述の方法として意図的に物語を選択することで、ときには歴史家自身が一人称の「私」として登場する」ような歴史の叙述スタイルが生まれたのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

イ 権力者に有利な記録に残された史料からは歴史の真実は見えてこないなので、歴史家が意図的にそれらの史料を選択する必要があるから。

ロ 歴史は単なる事実の集積ではなくて歴史家の好みや思想が反映しているのだから、歴史家の好みや思想にこそ歴史の真実があると考えられ始めたから。

ハ 歴史を記述する人も社会の中に存在し、史料の使い方や選択によって歴史が個人の好みによって再構成されるものだと認めることで、歴史の真実を書くことができるから。

ニ 日記や書簡など、従来の歴史学が特権化してこなかったためにほとんど残っていない史料によって人々の葛藤を叙述する感情の歴史にしか、歴史の真実は隠されていないから。

ホ 歴史は虚偽と真実の入り交じったものだと認め、そのような歴史叙述を方法化して知を生産することが、文学と歴史学が近づくもつとも優れたフィクションだと考えられ始めたから。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

家の中の普段の恰好でその辺を歩くと、子供達から「変なオジサン」と言われるが、ネクタイをしてスーツを着ると、子供達もアツパク感を感じるのか避けて通る。猫も杓子もスーツを着れば社会人として通用するようだ。スーツには個性がない。スーツとは記号なのだ。記号の差異だけが問題となる。大人になるということは、「しばらく見ないうちに、ずいぶん立派な記号にお育ちになりましたね」という言葉と対応するようになっていくことだ。

だから、いかなる記号をまもっているのが注目され、その記号のランキングで勝負がつけられる。どのブランドが高級で、誰のものより優れていて、誰のものに負けているのか、それだけが問題なのだ。「立派に出世したでしょ」と記号が話しかけてくる。どのブランドのスーツなのか、安物のつるし(注1)なのか、どのブランドの腕時計なのか。社会的地位の目盛りが少しでも上がったか下がったかで、評価するための指標とする。

町中到的ところ、格付けやランキング合戦が繰り広げられる。合戦のときの武士のように、手柄を立て、武勲を上げるために、街の中で「いざ勝負勝負」と合戦を挑む。「オレは勝った」「私は勝った」とほくそ笑むのが勝負終了の徴だ。勝負を分けるのは、笑い声の大きさだったり、腕時計の値段だったり、連れ歩いている恋人の美貌であったり、身長であったり、学歴であったり、年収であったりする。

都会とは、或る人の流れと別の人の流れが次々とすれ違ったり、交錯したり、並んだりする流体の世界だ。人の流れとその流れを構成する人員が、標準規格なのか、以上なのか、以下なのか値踏みがされ、それに応じて対応が変わってくる。記号とはすぐに読み取られなければならないし、すぐに正確に読み取られる標準的記号こそが、「善い記号」である。

現代社会では資本主義²という馴致機構が標準的システムであり、そこでは宣伝を見ることで購入動機を植え付けられるような者が、善い消費者であり、資本主義に適応した存在である。デイズニールランドのCMを見て、デイズニールランドに行きたい願望が沸いて、まよわずにすぐに行動するのが、「善い消費者」「善いメディア享受者」なのである。CMを見て、買いたくなって、買わずにはいられなくなって仕方がなくなること、つまりCMが購入行動のスイッチになっているような人間が、よく馴致された人間なのだ。CMに簡単に欺される人間が増えてこそ、人々の消費行動は予想しやすくなる。CMを見て、「もったいない」と思うような不埒な視聴者はお仕置きをされることになる。何の役に立つのだろうか、使い道がないから要らないという人は、資本主義の社会の中では、「購入装置」として見た場合には、壊れているか、不良製品である。

購入を促進するためには、購入を娯楽や快楽として錯覚させる方策が採られる。販売と購入は契約であり平等な関係であるのに、非対称性を投影して、購入する方が主人であると思ひ込んでしまう。「お客様は神様」とはよく言われる。売る方もそこまで購入者を持ち上げる。客の方がエライと思ひ込んでしまう。

「お金をわざわざ払って買ってあげてやる」思ひがクレイマーを作り上げる。「わざわざ店にまで来て、お金を払って買ってあげて、使ってやっているのに、この商品は使えない」と思うのである。商品を買って、恩を売るのである。A、究極のクレイマーは、代金を払わずに、タダで使いながら、商品と恩との等価交換を行い、「お金ももらわず、ただで使ってあげているのに」と文句を言う人物のはずである。

B、そういった価値の非対称的交換を目指す純粋消費の時代は終わりつつあるように思われる。CMで人間の心が躍り消費に逸る時代は終わったようだ。情報の荒波で擦られている内に心の皮は肥厚して何も感じないものとなってしまふ。多くの量を激しく強く伝えれば良いという法則に対抗して、心は強かにも、反応を停止して、自ら防衛策をとる。

需要と供給、生産と出荷、販売と消費といった関係を支配する法則に抗う流れがあってもよいのだが、古来そ

ういうものは嫌われてきたように思う。法則や規則に従順な人間こそ、ギョ^bしやすいのである。それに抗おうとする者は、困り者である。

自分で規則を立てることができて、間違わない人間がいたら、そういう存在者を救済する必要はない。勝手に自分で自分を救済していればよいのである。初期キリスト教の時代に、ペラギウス主義が徹底的に断罪された。ペラギウス主義とは、五世紀初頭、アウグステイヌスが活躍していた頃ペラギウスが主張した立場のことだ。自由意志によって律法を遵守することで救済に到達することができると考えたのである。一見すれば、ストア派(注2)を踏まえ、合理的な倫理思想のように見えるが、原罪思想や十字架のキリストの贖罪を破壊するものとして徹底的にアウグステイヌスによって忌み嫌われた。後に「ペラギウス主義」は相手を罵るための、悪魔的な教義というニュアンスを持つようになった。

キリスト教の正統カトリックに従うと、ペラギウス主義の誤りとは、人間に自由があると妄想したところにある。ペラギウス主義を徹底的に断罪し、少なくとも西欧社会においては存続できないまでに殲滅の限りを尽くしたのは、原罪の徹底的罪悪とそれを凌駕する十字架の栄光とを、教会の基本軸にしようという確信があったからだろう。西欧の結婚制度や家族のあり方や欲望の捉え方など、多くの側面において重すぎる影響を及ぼすことになるとは予想しなかったのかもしれない。

³ 自由というのは、人間の尊厳と栄光の微でありながら、人間の心と体をジリジリと灼き、苦しめるものだと思う。

一三三一年、京都で疫病が流行った。知恩寺八世善阿空円が、七日間念仏を百万遍唱えて、都で流行っていた疫病を退散させた。江戸時代に光明真言(怨霊退散に有効な呪文)を百万遍唱えた成就記念の石碑を見たこともある。呪文は意味を伝えるためではなく、反復によって強度を伝え、強度の昂進によって出来事を成立させる。伝えるべきメッセージを持たず、しかも音が伝えないながらも、反復を続けることで、出来事を成立させ、意味を表すというのは、過去の出来事へ向かう場合も忘れてはならない点である。

過去の出来事は反復できない。それを繰り返して語っても過去は何も変わらない。メッセージとして何かを伝えるとしてもそれは変化を引き起こすために、メッセージが伝えられるということはない。伝えられても何も生じない。

過去の記憶が何度も何度も立ち現れるとき、それは出来事そのものが、自分の(声)が聴かれることを望んでいるのかもしれない。百万遍の呪文を語るとき、呪文を語っているのは、人間ではなく、阿弥陀様が人間の舌を使つて語っていると表象される。人間が行為の主体であるとか自由であるという発想は、現代では当然と見なされているが、決して自明のことではない。

念仏も言葉であり、記号だ。しかし、空也上人の立像に、念仏を唱える口から六体の阿弥陀仏が現れたという言い伝えを形にしたものがある(空也上人立像、康勝作、六波羅蜜寺蔵)。南無阿弥陀仏という六字の名号があまりにもありがたく、人々の心に染み入り、言葉の一つ一つが仏となって現れていると表象されたように、⁴記号もまた記号以上のものである。言葉が何度も何度も繰り返されるとき、そこには言葉以上の何かが見えてくるのである。

反復は、記号作用において現れる何かを伝えるという意味の働きが破壊されて、意味によって覆い隠されているものが露見して、こちらの側に迫ってくるのだ。記号もまた受肉させる力を有しているのである。

(山内志朗『過去と和解する哲学』による)

(注1) つるし …… ここでは既製品の衣服のこと。

(注2) ストア派 …… ギリシア哲学の一派。禁欲主義的な立場から、情念に流されず、理性に拠つて生きることの重要性を説いた。

問七 傍線部 a 「アツパク」、傍線部 b 「ギョ」のカタカナにあてはまる漢字を楷書で記しなさい。

問八 傍線部 1 「ほくそ笑む」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- イ 相手のことを見下して、鼻先でふんと笑うこと。
- ロ うれしさのあまり、思わず顔をほころばせて笑うこと。
- ハ 大勢の注目を感じながら、晴れやかな気分で笑うこと。
- ニ 他人にわからないように、しめしめとひそかに笑うこと。
- ホ 自分の気恥ずかしさをごまかすために、小さく笑うこと。

問九 傍線部 2 「資本主義という馴致機構」とあるが、この文章の筆者は「資本主義」をどのような仕組みと捉えているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

- イ メディアを通じて多様な情報と選択肢を提示することで、記号としてのモノを組み合わせれば自分の複雑な内面を表現できると人々に錯覚させていく仕組み。
- ロ 購入した商品から新たな価値を生み出していく人々を「善い消費者」と肯定することで、メディアの情報を積極的に受けとめる身体を作り上げていく仕組み。
- ハ 人々を消費による競争に急き立てるだけでなく、市場で行われる取引をあたかも権力関係のように表象することで、社会を限りなく分断させていく仕組み。
- ニ 規格化された商品を市場に供給し、モノによって表現される価値基準を一元化させることで、社会本来の多様性や流動性を見えにくくさせる仕組み。
- ホ 人間の個性やモノの性質を記号に置き換えるだけでなく、メディアを通じてその記号の読み方を教育することで、人々のものの見方を統制していく仕組み。

問十 空欄 ・ に当てはまる語句として最も適切なものを、次の中からそれぞれ選び、その記号を記しなさい。

- A イ なぜなら ロ しかも ハ あるいは ニ したがって ホ にもかかわらず
- B イ そのうえ ロ つまり ハ ただ ニ むしろ ホ また

問十一 傍線部 3 「自由というのは、人間の尊厳と栄光の徴でありながら、人間の心と体をジリジリと灼き、苦しめるのだと思う」とあるが、筆者の考えを説明した次の一文の空欄 に当てはまる語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

なにもものにも拘束されないという「自由」は人間の尊厳の基本的な条件だが、一方で人間は、 存在でもある。そのことを踏まえて筆者は、「自由」は人間を苦しめるものでもある、と考えている。

- イ 家族や共同体の支えなしには生きることができない
- ロ 自分を律する規準を他者に求めずにはいられない
- ハ 権力者が作った法や規則に抵抗することができない
- ニ 富や権力を求める欲望を抑えることができない
- ホ 自分以外の存在の「自由」を認めることができない

問十二 傍線部4「記号もまた記号以上のものとなることがある」とあるが、どういふことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

イ すぐれた人格の持ち主が祈りの言葉を一心不乱に唱え続ける真摯な姿を見せることで、周囲の人々の心を動かすことができる、ということ。

ロ 人間の声は決して機械的なくり返しにはならないので、同じ言葉であっても、一回ごとに異なるニュアンスが生み出されてしまう、ということ。

ハ 文字として表現された一つ一つの音の響きを全身で感じ取ることを通じて、その文字に潜んでいた本当の力を呼び起こすことができる、ということ。

ニ 言葉で直接他者に働きかける以上に、同じ語句をひたすらくり返すという行為そのものが人々の間で記憶すべき出来事としての価値を持ち始める、ということ。

ホ 同じ表現を何度も声に出して身体に覚えさせる作業を通じて、その表現に関する一般的な理解とは異なる独自の解釈を引き出すことができる、ということ。

問十三 問題文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。

イ 現代社会の人々は、消費を強制するような情報の洪水から逃れるために、自分たちの中だけで通用する新しい記号のあり方を模索しようとしている。

ロ 子供たちが「スーツ」姿の大人を無意識に避けてしまうのは、成長するに従って苛酷な競争社会の中に取り込まれていくことに不安を感じているからである。

ハ 代金を支払わずに商品を使おうとするクレマーが登場したことは、個人の消費行為に依存した資本主義のあり方が限界を迎えつつあることを示唆している。

ニ キリスト教の影響が強い西欧とは異なり、過去の日本では、宗教者が厳しく自分を律することを通じて人々を救済することができるという教えが信じられていた。

ホ 都市に暮らす人々は、複数の記号の組み合わせを通じて自己自身を表現しているので、すばやく正確に読み取ることができるわかりやすい記号を好む傾向がある。

(以下余白)

問六 問五 問四 問三 問二 問一

<R06182081>

受験番号	万	千	百	十	一
カナ氏名					
氏名					

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)

2024年度

国語

(解答用紙)

No. 1 / 2

採点欄

(この線で二つ折りにして書きなさい)

問十三 問十二 問十一 問十 問九 問八 問七

A

a

B

b

2024年度

国語

(解答用紙)

No. 2 / 2

採点欄